

EurekaXIV

六年制通信 No.18 令和8年9月10日(木)号

説明会より

毎年この時期になると、小学生の保護者を対象に学校説明会を開催しています。三重中高六年制の取り組みについて、君たちの学校での様子について、いろんなところに応募してはいい評価をいただいていることなど、丁寧に説明をしています。保護者の皆さんも町で君たちを見かけることが多いようで、「先生のとこの生徒さんは本当に服装もきちんとしていて、見ていて気持ちがいいです」などと言われることがあります。顔が赤くなるのを感じながら「ありがとうございます」とお礼を言っています。いや、君たちにもお礼を言わなければいけませんね。また、制服を着ているとき、自分は学校の代表として見られているということを改めて自覚してくださいね。

さて、学校教育、と言いますか私たちの場合は中学高校の教育ですが、この教育の目的を私は保護者の方たちにこう説明しています。6年間の中高等教育を終えたのち、聞く、読む、話す、書くという言語活動が何不自由なくできるようになること、それが教育の目標です、と。これ、何とも簡単そうに思えるかもしれませんが、なかなか難しいのですよ。君たち何かを誰かに伝える時「必要十分な情報を簡潔に整理して」伝えることが出来ていますか。相手の知りたいことを一度でしっかりと伝えることは、訓練なくしてなかなかできません。日本人だから日本語がちゃんと操れると思ったら大間違いなのです。聞くも読むも書くも同じことです。君たちはやがて、社会に出たら必ず独学をしなくてはならない場面に遭遇します。このとき十分な言語技術が身についていることが、君たちを助けてくれるのです。言語技術という観点が大切ですね。

もう一つ、独学ができるために必要不可欠なこととして「ベストを尽くす」経験を通して、自分の実力を正しく知っていることです。何がどの程度できるか、あるいは何がどの程度できないか、自分が全力を尽くした経験がなければここを間違えます。ここを間違えると独学の「計画」ができません。ベストを尽くした経験がないと、自分だって「本気を出したらできる」という、決して本気になったこともなくこれからも決してなることのできない人間の言い訳だけを覚えてしまいます。これはなかなか厄介ですよ。気をつけなくてははいけません。私たちの四大綱は、もちろんどれも大切ですが「ベストを尽くす」経験は、社会に出たのち最も具体的に君を助けてくれるのです。

また、全力を尽くすのは、実は日々の心の安定にもつながります。私たちがよく耳にするのは「心の安定には早起が一番」でしょうか。世間が朝の活動を始める1時間か2時間前に起きて、自分だけの時間を持つわけです。勉強でも、あるいは読書でもいいのです。これから一日が始まる前に充実したもう一つの自分だけの時間を持つと

心に余裕が生まれるというのですね。これは納得できますね。スポーツでも朝の基礎トレーニングから一日を始める人は多いのではないのでしょうか。

私の言う「全力を尽くすことが心の安定につながる」というのは早起きのことではありません。仕事なら仕事、勉強なら勉強、これを英語では両方 **work** と言っていいと思うのですが、仕事でも勉強でも力を余さずに頑張れば、つまりベストを尽くせば心は穏やかでいられる、ということです。

「勤靡餘勞 心中常閑（つとめてろうをあますところなく こころはつねにかんあり）」、これは陶淵明（とうえんめい）の詩の中の一節です。陶淵明といえば、「帰去来の辞」が有名で、言ってもたいてい初めの「帰りなん、いざ」くらいしか出てこないのですけどね。この人の詩に、三重高校の校歌にある「靡く校旗の…」の「靡く」を「なく」と読ませる「勤靡餘勞」があることは何となく知っていたのですが、後半は何だったか全く記憶になくて、今回は見つけるのにかなり時間を要しました。でも、ありましたよ、岩浪文庫の『陶淵明全集』（上下巻）の下巻の 238 頁「自祭文」の中にありました。正字で書いてありますから難しそうに見えますが「餘」は余、「勞」は労です。意味は「働く時に力を余さず精一杯働くと気持ちにはいつも余裕がある」というくらいでしょうか。精一杯の努力をしているという充実感と心地よい疲労は、きっと心に良い影響を及ぼすのでしょうね。これも、よくわかる気がします。短い一節ですから暗記しなさいね。

今週のおすすめ

・夏川草介 『神様のカルテ』（小学館文庫）

夏川さんの『勿忘草の咲く町で』は前に紹介しました。この物語は NHK の BS 放送でドラマ化されていて、私、全話楽しく観ておりました。『神様のカルテ』は映画にもドラマにもなっているのですね。残念ながら、こちらはどちらも観ておりません。原作本は『神様のカルテ 2』、『神様のカルテ 3』と全三冊読みました。作者が長野県で実際に地域医療に従事する医師なのですね。地域の風景がよく描かれているので、長野県の人が読んだら私よりもっと楽しめることでしょう。ちなみにこの作者、間違いなく酒好きですね。長野県はそんなに名酒があるのですかね。今度行く機会があったら探してみようと、そう思うてしまうくらい酒を礼賛しています。

御嶽荘という「築五十年を超える幽霊屋敷のごとき二階建ての木造家屋」の一室に愛妻のハルさんと住んでいる栗原一止医師が主人公。「24 時間、365 日対応」の地方病院に勤務。激務の中、大学の医局からの誘いが舞い込む。ここでしかできない医療がある。しかし日進月歩の最先端の医療を学ぶには医局に行くしかない。悩む一止の姿と栗原を頼りにする患者たち、そして病院のスタッフ、御嶽荘の変わった面々、彼らが織りなす人間模様が愛情をこめて描かれている物語です。

「一止」という名を続けて書けば「正」になる。医局に行くか病院にとどまるか、悩む一止の背中を押す患者さんの言葉です。

ぜひ『神様のカルテ 3』まで読んでみてください。いい物語ですよ。

BGM は 竹内まりや の *September* でした…。